

「神信仰は謙遜を生きること」

2015年10月20日

ルカによる福音書 17章7節～10節。「あなたがたのうちだれかに、畑を耕すか羊を飼うかする僕がいる場合、その僕が畑から帰って来たとき、『すぐ来て食事の席に着きなさい』と言う者がいるだろうか。むしろ、『夕食の用意をしてくれ。腰に帯を締め、わたしが食事を済ますまで給仕してくれ。お前はその後で食事をしなさい』と言うのではなからうか。命じられたことを果たしたからといって、主人は僕に感謝するだろうか。あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです』と言いなさい。」

主イエスは、ある譬えを語られた。畑を耕すか羊を飼うかする僕（奴隷）がいた。彼が仕事から帰って来た時、「すぐ食事の席に着きなさい」と言われることはない。主人から「夕食の用意をしてくれ。腰に帯を締め、わたしが食事を済ますまで給仕してくれ。お前はその後で食事をしなさい」と命じられる。当時の奴隷たちは、当然ながら、厳しい身分制度の下で、過酷な労働が強いられていた。

この譬えを読むと、子どものころ、近隣の農家の様子と重なって思い出す。農家は家族総出で仕事をする。仕事を終え、夕方帰って来ると、男（夫）たちは風呂を沸かし入る。女（妻）たちは野良着のまま、夕食の準備をする。現在のようにガスはなく、薪で炊いていたので、夕食作りも大変であった。家族一緒に夕食を食べるが、女たちは後片づけをして、妻は最後に風呂に入る。日中の仕事では、男たちはハードな仕事をし、疲労度は高いと言えよう。もちろん、女たちも家族であり、奴隷ではないが、彼女たちは、主イエスが譬えた奴隷と重なる仕事をしていた。

当時の奴隷たちは帯を締め、夕食を作り、主人の給仕をした後、ようやく食事ができる。彼らは命じられたことをしただけで、主人からは感謝されず、当然と見なされる。主イエスは、命じられたことを果たし終え、「『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです』と言いなさい」と言われる。奴隷には、当然の義務であり、この奴隷制に疑義を持つ人はなかった。パウロは神に愛された個々人の尊厳を説きながら、奴隷制については、何の疑問も感じていない。奴隷解放は19世紀になって、英国、米国から始まった訳である。現在、奴隷制は禁じられているが、奴隷のように強制労働させられている例は無数にある。時代を超えて、法は勝者に都合よく運用されている。サウジアラビアの人権侵害は、米国が潰したイラクのフセイン時代以上だと言われている。

主イエスは奴隷の譬えを語り、私に従うあなた方も同じである、やるべきことをやり終え、取るに足りない私は、しなければならぬことをしただけですと言いなさいと言われる。この言葉は弟子たちに語ったとされているが、ルカ福音書が書かれた時代の教会指導者に対して語られた言葉であろう。神を信じる者は全力で、神に仕え、福音のために働く。そして、その働きは特別に誇り得ることではなく、当然のことである。

パウロはフィリピ書1章1節で「キリスト・イエスの僕（奴隷）であるパウロ」と自称し、主イエスの奴隷であることを誇らしげに書いている。パウロは主イエスの奴隷として、全力を尽くして仕え「しなければならぬことをしただけです」という生涯を送り、殉教した。神信仰は謙遜を生きることであるが、謙遜とは与えられた人生を神奉仕に使い尽くすことである。そこに、神からの確かな祝福がある。